

The 50th
Kanagawa
Art Exhibition
2014

第 50 回 特 別 記 念

第 50 回
神 奈 川 県
美 術 展

第 50 回 神 奈 川 県 美 術 展

1 期 展

[工 芸・書・写真] 平成 26 年 10 月 5 日(日)～10 月 12 日(日)

2 期 展

[平 面 立 体] 平成 26 年 10 月 15 日(水)～10 月 19 日(日)

会 場

神奈川県民ホールギャラリー

主 催

神奈川県美術展委員会

神奈川県民ホール

[指定管理者: (公財) 神奈川芸術文化財団]

神奈川県

協 賛

(公財) はまぎん産業文化振興財団

神奈川県文具事務用品団体連合会

(株) ニコン／(株) ホテル、ニューグランド

後 援

神奈川新聞社／NHK 横浜放送局／tvk (テレビ神奈川)

FMヨコハマ

第 50 回神奈川県美術展 関係者名簿

(平成 26 年 10 月 5 日現在)

神奈川県美術展委員会

委員長 酒井 忠康

副委員長 林 義亮

委員

内田あぐり 本江 邦夫 北澤 憲昭

水沢 勉 富田 康子 関井 一夫

船本 芳雲 石川 芳雲 倉石 信乃

前田 利昭 立石えり子 中村 英二

審査員

平面立体

内田あぐり 辻 けい 長門 佐季

福士 朋子 本江 邦夫

工芸

馬越 寿 榎本 洋二 笹山 央

関井 一夫 富田 康子

書

高橋 利郎 中西 雅舟 西村 東軒

船本 芳雲 渡部 會山

写真

伊奈 英次 倉石 信乃 藤村 里美

前田 利昭 山田 信次

出品点数一覧表

	工芸	書	写真	1 期展小計	平面	立体	2 期展小計	合計
応 募	147 人 (165 作品)	153 人 (153 作品)	124 人 (173 作品)	424 人 (491 作品)	255 人 (346 作品)	40 人 (41 作品)	295 人 (387 作品)	719 人 (878 作品)
入 選	88 人 (88 作品)	120 人 (120 作品)	75 人 (75 作品)	283 人 (283 作品)	103 人 (103 作品)	16 人 (16 作品)	119 人 (119 作品)	402 人 (402 作品)
入 賞	8 人 (8 作品)	8 人 (8 作品)	9 人 (9 作品)	25 人 (25 作品)	7 人 (7 作品)	2 人 (2 作品)	9 人 (9 作品)	34 人 (34 作品)



今年、記念すべき第50回神奈川県美術展が、数多くの意欲と熱意あふれる作品の出展を得て盛大に開催できますことを、主催者の一人として大変嬉しく思います。また、本美術展の開催にあたりご尽力いただきました関係の皆様にご心からお礼申し上げます。

神奈川県美術展は、昭和40年の創設以来、県内最大規模の公募美術展として、新人作家の育成と美術文化の向上に努め、本県における美術文化を牽引してきました。

50年の歴史を歩む中で、美術に親しむ方々の裾野を広げるとともに、入賞を契機に全国、そして世界で活躍する芸術家を数多く輩出してきました。ここ神奈川から日本を代表する人材の発掘・育成に貢献できたことは、大きな誇りです。

今回も、平面立体、工芸、書、写真の各部門合わせて878点もの応募作品の中から、厳正な審査を経て選ばれた素晴らしい作品の数々が展示されています。作家の方々が技を磨き、豊かな感性を自由な発想で表現した作品は、私たちを魅了して止みません。ご来場の皆様には、才能あふれる作品の数々を存分にご堪能いただけるものと思います。

素晴らしい芸術作品は、人々を引きつけ、心に働きかけ、豊かな精神を育む力を持っています。

県では、文化芸術のそうした力を大切にして、魅力と賑わいにあふれる神奈川の創造に取り組んでいます。皆様方におかれましては、今後とも美術を通して豊かな感性と創造性を発揮していただき、人々が集い、輝く、活力に満ちた地域文化の発展により一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

最後に、このたびご出品くださいました皆様の、作品を創造する熱意とご努力に深く敬意を表しますとともに、皆様のますますのご活躍を心からお祈り申し上げます。

平成26年10月5日

神奈川県知事 黒岩 祐治



神奈川県美術展は、ちょうど今年が節目の50回目に当たります。そこで、あらためて振り返ってみますが、私にとって印象に深いのは、やはり1965(昭和40)年に始まった第1回展のことです。

当時、私は県立近代美術館に勤務していました。ですから県展開催のいきさつを耳にし、併せて会場となった近代美術館では業務の裏方の一人として、慣れないお手伝いをしていました。

いまから思えば、この時期というのは、戦後に一区切りつける端境期だったのでしょうか。前年に開催された東京オリンピックの余熱と興奮のようなものが、多少、残っていたような気がします。大賞の受賞者には、研修の意味での海外派遣を条件に、当時としては高額賞金が授与され、そのニュースは県内にとどまらず、全国的にも大きな話題を投げかけました。

第1回展は、会場の都合で部門を公募と招待に別け、公募部門(「絵画・彫刻」)は近代美術館(鎌倉)で、また招待部門は横浜高島屋(「絵画・彫刻」)、有隣堂(「工芸」)、松喜屋(「書」)で開催されました。

公募部門の選考会には、土方定一館長をはじめ、その頃、逗子にアトリエのあった海老原喜之助など錚々たる審査員が集って、熱心に意見をかわしていたのを憶えています。とくに元気な濁声で、海老原氏が親しかった土方館長やほかの審査員に、身振り手振りで自身の造形思考をぶっつけていたようすは印象的でした。

機械的な選考会でなかったのは、勿論ですが、この県展を新進作家の登龍門にしたい、その意味では出立(1回目)が大事なのである—というような、一種の熱気が張っていました。

その後、県民ホールの開設(1975年)や、県展の機構改革を経て、今日のかたちに落ち着きましたが、その間、多くの人たちにとって、もっとも身近なところで、時代の新しい美術作品にふれることのできる貴重な機会となり、また場の提供となったということを、強調しておきたいと思います。その意味で県展というのは、単に美術愛好者の関心にとどまらず、多くの人の理解と支援を受け入れることで、暮らしのさまざまな創意工夫と連結する意義の大切さを認識させました。

神奈川県美術展は、これまでの応募者の状況や選出された作品のレベルなどを鑑みて、全国でも有数の質の高い県展であることは、私がここで申し上げるまでもありません。

いささか私事に傾いた話をはさみましたが、これからもこの県展を場に、盛んな交流と切磋琢磨によって、新たな時代を切りひらく美術作品が生まれることを大いに期待しています。

平成26年10月5日

神奈川県美術展委員会委員長 酒井 忠康

1期展 工芸・書・写真

受賞作品目録 工芸・書・写真	8
入選作品目録 工芸・書・写真	9
審査講評 工芸	13
審査講評 書	14
審査講評 写真	15
工芸部門 受賞作品	16
書部門 受賞作品	21
写真部門 受賞作品	26

2期展 平面立体

受賞作品目録 平面立体	32
入選作品目録 平面	33
入選作品目録 立体	34
審査講評 平面立体	35
平面立体 受賞作品	36

神奈川県美術展50年の歴史

神奈川県美術展50年の歴史 藤嶋俊會	44
歴代大賞受賞者	49
資料 一 過去に掲載された神奈川県美術展関連記事	51
図録アーカイブについて	55

1 期展

工艺·書·写真

受賞作品目録

工芸

大賞	内田 望	横浜市	Moon Rabbit	金工
準大賞	宮尾 洋輔	足柄上郡松田町	曲硝子舞布船	硝子工芸
特選	渡邊亜紗子	横浜市	棲みか(4個組)	陶芸
特選	吉岡 末子	茅ヶ崎市	春霞	染織
奨励賞	花塚 愛	横浜市	雫の底	陶芸
美術奨学会記念賞	小酒井基紘	秦野市	ロスチャイルド キリンの行進	織物
美術奨学会記念賞	芦川 陽介	相模原市	彩(3個組)	硝子工芸
ホテルニューグランド賞	興石 孝志	横浜市	活	切り絵

書

大賞	三宅 華子	逗子市	春暁
準大賞	松田 紀子	横浜市	天上の青
特選	岡田 珠美	東京都	良寛の歌と句
特選	川名 晞心	横須賀市	積雨輞川荘作 王維詩
奨励賞	西澤 蒼海	横浜市	李賀詩 花遊曲并序
県文具事務用品団体連合会賞	田草川雅子	川崎市	吉野山
美術奨学会記念賞	竹内絵里子	中郡大磯町	サーカス
美術奨学会記念賞	竹内めぐみ	中郡大磯町	若葉かおる

写真

大賞	五十嵐 航	秦野市	島時間(3枚組)
準大賞	米山 好人	横浜市	アジア酒場外交(3枚組)
特選	商 家訓	横浜市	戦痕(3枚組)
特選	原田 茂雄	川崎市	母さん私の帽子
特選	伊藤 敏児	茅ヶ崎市	過ぎし夏(3枚組)
奨励賞	日比野英雄	平塚市	山里の案山子達(3枚組)
ニコン賞	古郡 和敏	茅ヶ崎市	鎮魂の日(3枚組)
美術奨学会記念賞	星崎 裕基	小田原市	静かな火(3枚組)
美術奨学会記念賞	横山 和江	横浜市	横浜中華街の日々(3枚組)

※美術奨学会記念賞は、長年、神奈川県美術振興に寄与してきた財団法人神奈川県美術奨学会を記念して創立され、35歳以下を対象とした賞です。

※県文具事務用品団体連合会賞は、神奈川県文具事務用品団体連合会から書部門の該当受賞者に贈られる賞です。

※ニコン賞は、(株)ニコンから写真部門の該当受賞者に贈られる賞です。

※ホテルニューグランド賞は、本年度より(株)ホテル、ニューグランドから工芸部門の該当受賞者に贈られる賞です。

※市町村名は現住所です。

※各部門大賞、準大賞の略歴は受賞者の提供によります。

入選作品目録

工芸

玉川 哲也	宙
田中 好子	リズム
辰井 康雄	泥彩一輪差「千夜一夜」
望月 汎岳	額(トウチジンジャ)
今井 信二	青白磁陰刻魚紋輪花鉢
高野源太郎	染付赤絵柘榴文鉢
古坊 聖子	水族館
清水 実	組木パズルGB2(2個組)
笠原 頼子	野毛の道化師
福永富砂子	浮遊スルフユウ物体
藤波 洋子	鷺浜
沖 知江子	硝子蓋物－鳥の記憶－
森岡由記子	散華
林田 洋子	怒りて悲しく…(4個組)
若林 和正	貝殻焼締器「望」
上野 弘子	大地
吉池ちひろ	大島紬鞠
栗津 千慧	こうら
小林 伸年	まちぼうけのツール
千葉ひろみ	生命2014
五十嵐里美	たまゆら
大塚 国男	赤と黒(2個組)
今林三恵子	広場の孤独
佐藤 一彦	復興への力
石渡由美子	紡いだ糸と染めた糸で織ったほっこりラグ
安藤由美子	練り込み皿 菱(3個組)
小山 透	繋ぐ(22個組)
石川ヤイ子	日本刺しゅう朝がお
杉田 瑞希	菊
石橋 伸一	活火山
務川 洋子	豊穣への祈り・穀物盛器
本田 和子	あけぼの
小林 広美	掛け子付手箱「薫風」
田中 宏治	寿
福田 典子	冬・寒牡丹
浅井 友里	手(2個組)
齊藤未奈海	膨らむ色
小竹 章子	輝き
金 智圓	Seeds
金子 恵子	ジャックと豆の木

片桐れい子	リラックス、うめちゃん
丸岡 重信	櫛拭漆十二稜盆
前島 千絵	竹模様花器
八木 裕之	Re-make 信長 - II
沖山 秀夫	小鹿田飛カンナ皿
船橋 智美	NOHARA
松本 充央	黒彩長方皿
加藤 仁也	染付草花紋組皿(5枚組)
高田リツ子	曼荼羅～星～
小笠原 森	カタマリノカタチ(5個組)
下平久美子	碧空爽舞
吉田 浩一	春の訪れ
加藤 貢介	鉄製大皿
山本ゆう子	スーパームーン～同じ空の下～
山本 志保	泣ける
宮川香代子	長方盆「刀華」
安部 邦子	OUM
新井 早苗	花竜と竜使い(2個組)
石井 征夫	コロンプスの“SANTA MARIA”号
近藤 純子	ゆらぎ
橘川 和男	虚無恬淡(4個組)
大野 澄子	小花によせて
田中 ちか	極楽蓮
山本 朋子	杯(16個組)
鈴木 典子	淡雪の華
大原 乾資	藍の板締染
尾形 政子	WAVE
佐藤雅一郎	対馬・若田硯「羽衣」
山寄 直子	魚文掻き落し皿
高木 暁	宇宙散歩
土屋 幸夫	蒔絵硯箱「秋桜」
大島 弥生	はなてまり
松本 圭子	春宵
小林 忠生	ひょうたんからこま
植松 竹邑	風器
原 祥子	森の中の湖
鈴木 員夫	花器 連なる大地
千葉 真理	My favorite things(2枚組)
竹内 レイ	2つの花が向かい合った時
根本 正昭	双耳環透かし文香炉

※掲載は出品者番号順です。

佐藤 典克	縫
田島 靖久	練上げ曜変壺
金井 裕子	慈雨(9個組)
北原ふみ子	Dream Dream(2個組)
菊地原裕基	Made in Heaven
名古屋瀬津子	Sincerely
山根 悠介	白磁蓋付飾壺
堀井 孝雄	源氏物語五十四帖より 常夏、藤裏葉

書

松本 亘正	陸放翁詩
馬場 虹苑	日守鎌の詩
山本 清子	またたき
平船 清流	草枕
福本 泰子	清流に舞うホタル
松尾 純子	琥珀色の泡沫
長井 黙庵	東山魁夷の詩「麦秋の丘」より
平間 秀慧	虹の光
谷内 秀翠	古屋恵美子の詩 のどかな午後
松本 弘子	春月
久村 拓司	東山魁夷の文
片平 堯子	希望
本間 琴秀	冬の日
日守 鎌	ブラインド
中山 政子	雨宿り
福田 夢澄	本牧埠頭の親子釣り
川崎 純子	接点
石井 久美	真理の詩 各駅停車
竹内千恵子	残暑
大木 明子	山野空汰の詩
佐々木瑞枝	青 蒼への憧憬
児玉 真理	播磨平野
平澤 毅	土埃がうれしい
相馬 澄月	まちのあかねの詩 陽炎の街
久保田富美子	徒然草抄
清水 理佐	雪のうち
小林 千幸	ロマンを追って
深瀬加代子	陽炎の街
小林美知子	朧月夜
比留川秀水	光畑美紀の大地の始動
平出 節子	藤井杜志の詩
金子 流川	内視反聴
遠藤 子杏	開物成務
山之口悦子	源氏物語の歌
棧敷 東煌	秋の月
大木 英泉	風濤
池上 恵峰	さびしさに
眞坂 裕子	はちすの露
松尾 米子	女流俳人の句
池田 宇鷺	梅村

※掲載は出品者番号順です。

加藤 香華	程德望祠部登月亭
橋本 紫柳	題寒林遠岫圖
新井 幸舟	田園雜詩 其一
上村 泊舟	夏夜西亭即事
中山 壽香	送人歸蜀
三橋 和泉	石嶺関所見
黒川 鶴翠	杜審言詩
中山 見瑞	黃任詩 暑雨後坐月
島村 秀芳	劉基詩
渡部 祥優	劉禹錫詩
小磯 栄芳	楊榮詩
杉村 莊雲	袁凱詩
小松 公子	秋風の
重田 鶴耀	江亭秋霽
山口さゆり	雅流弘器
森川 信子	楽多賢友
平林 裕子	光風霽月
塚口 翔之	旅懷
石黒 雅彦	題灌山小隱
新井 青谿	烏夜啼
藤倉 汀雪	澄心得妙觀
高橋 暢芳	五言律詩
星野 美泉	舞
黒田 佳子	古今和歌集より
徳原 玉萩	鸞
三谷 嶽雨	江馬細香の詩
木下 清華	わが宿の
黒沢 玲香	入若耶溪
浅間 静江	俳句二首
川手 敬湖	新古今集の歌5首
石井 香月	秋山
兎澤 羊舟	歸舟載茉莉珠蘭數種際晚香氣尤烈以酒賞之
荒川 涼舟	庭桂始得消息
松田 栖舟	腋従愚庵大師陳際叔徐世臣湖干閑歩
佐藤 白峰	蓬萊三殿待宴奉勅詠終南山
高木 香葉	冷泉亭
横山 聖水	夏日偕東沙赴練塘北園之遊
鯉沼 紫虹	朱希晦の詩
小山八夜子	河魚天雁
阿部 馨月	秋の蝶

下門 芳子	風
中村久仁江	食卓の花
前橋 蒼峻	秋鴈
生駒 蘭嵩	王昌齡詩
渋谷 莊江	納涼
片岡 嵐山	田園雜詩
牛山 香流	王漁洋詩 吉水道中望楊誠齋故居
武 啓茜	かすみたち
浦 堯秀	秋登宣城謝朓北樓
片岡 雪輝	李白詩
大八木耕一	静まれる樹
佐々木永隆	人を思ふ歌
中尾 直子	朝の山
河田 和代	さくら花
鳥海 富子	ゆく春の
小山 莊雪	周原幽居
浅見 玲湖	王維詩 登弁覺寺 過香積寺
神山 紅雲	汪洪度詩 七里瀨
片岡 稲處	李白詩 経下邳圯橋懷張子房
三村 早苗	百人一首
多田 文江	小倉百人一首
伊原知恵子	百人一首
加藤 美和	百人一首
五十嵐杏華	良寛
相根 恒舟	万葉集三首
河又世津子	月やあらぬ
榎本 蘭方	新古今和歌集
川上 眞凜	洛神賦
滝川 実桐	峰の光
吉永 祥芳	関戸本古今集
八十川茜舟	万葉集
池田 玲子	李青蓮詩
猪俣 香浦	傅梅詩
鈴木 翠風	劉嗣綰詩
土屋 景暉	李東陽詩
根岸 玲香	厲鶚詩
松前 沙瑛	袁枚詩
四壁 透	寧静致遠
中田 早苗	世間虚仮・唯佛是真
猪野 光舟	逢吉丁辰

※掲載は出品者番号順です。

写真

綱島 基之	エキサイティング・レース
栗原 茂	メルトダウン(3枚組)
大出 光信	ストリート(3枚組)
庄司 精一	素顔
田中 洋一	旅の記憶(3枚組)
金子 正隆	たん生日……早くたべたい!
清水 治弘	キャベツ畑(2枚組)
佐藤 忠	漁婦
佐藤 治道	試合にいどむ(3枚組)
岩崎 茂樹	蒼夢(3枚組)
渡辺 脩子	南木曾惨状(3枚組)
小田柿雅彦	これで無病息災(3枚組)
五十嵐勲子	ファンタジー
宮坂 駿一	路辺の石仏(3枚組)
長谷部英道	休憩時間
西沢一比古	裏景・快適装備(2枚組)
竜崎 浩	水泳(3枚組)
長嶋 巧	朱に遊ぶ
南 信一郎	横浜公園二題(2枚組)
大貫 正志	ちょっと待ってよ
石渡 延次	童女回想(2枚組)
今岡 裕文	花に囲まれて
稲次 正知	雨の日のカフェ通り
向田壽美子	タさり幻燈
中牟田 浩	夕陽一呑み鷹取山の神
茂手木千晶	染色(2枚組)
古山 豊	天空の十字路
津田 祥夫	平成あそび術(3枚組)
羽鳥 博隆	火造りの匠(3枚組)
佐藤 昌弘	妖
木村 宣夫	堀川の一表情(3枚組)
平谷麻喜子	daydream(3枚組)
小池 將夫	遡上
小沼 公子	時の流れ(3枚組)
星野 孝子	たのしいね(3枚組)
貞本 一彦	森をぬけて
塚田マサ子	異郷の花(横浜英連邦戦没者墓地)(3枚組)
稲垣 健	まなざし
木村 夏子	僕と夏と初めて(3枚組)
三村 信昭	恐竜ランドようこそ

秋本 伸明	聴惚れる
高橋 英昭	夢を追って(3枚組)
道越 忠昭	氷塊達の目覚め
和田 政夫	みそぎの日(3枚組)
有馬 良江	島のボス
多田 正司	土石流の爪痕(3枚組)
鳴海 廣治	八月の瞳
小島 輝夫	厳冬八方尾根(3枚組)
安部きよ子	女子力(3枚組)
南條 敏之	湘南海岸砂防林(3枚組)
長谷部忠徳	左義長
藤本 壽春	種子舞(3枚組)
中山洋之助	孤独の女(3枚組)
小島 満男	夕刻
近藤 敏幸	くすぐらないでえ～
竹本 光雄	街と街をつなぐもの
岡松 桂子	赤・青・黄色によるコンポジション(3枚組)
田中 雄二	YOKOHAMA BLUE(3枚組)
加山 邦輔	少年、行事2(3枚組)
吉原 靖男	大雪の日(3枚組)
新城 英一	しあわせの影(3枚組)
鈴木喜三郎	一瞬の気配
鈴木 真人	今日から学校(3枚組)
小山 仁	メコンの足船
漆原 利大	要塞跡(3枚組)
穴井 伸二	扉
斎藤 都子	その先へ
柴崎 泰成	喜、怒、愛な楽しい神奈川県(3枚組)
西尾 光行	「ぬいぐるみ」じゃないよ!!
竹田 宏司	ちょっと
佐藤 健司	夢蛭
高橋 春生	京浜の夜明(3枚組)
日野るり子	初秋の朝
秋本 富男	廃坑の秋(3枚組)
伊藤有里子	風をみる

※掲載は出品者番号順です。

工芸

富田 康子

今年は、第50回展ということで、例年以上に募集に力を入れたという。その効果か、工芸部門の応募作品数は165点、応募者数は147人と、昨年よりも一割以上増加した(昨年の応募作品数147点、応募者数128人)。応募されたすべての方々に、ここでまずお礼を申し上げたい。

ところで、県展だけでなく、造形表現全般の傾向からいって、工芸と立体造形との差は、しばしば見定めがたい。さらに、県展では、工芸と立体(平面立体)両部門に応募する応募者もめずらしくないのが実情である。そうしたなか、工芸部門に応募される方々は、この部門にどのようなことを期待しておられるのか。応募作品が増えた分、その点での緊張も強かった今年の審査であった。

以下に、審査経過を簡単に報告する。

一次審査では、審査員5名が35票ずつ票を持ち、投票。165点の応募作品のうち、1票以上を得た96作品を入選とした。

二次審査では、審査員が10票を持って投票。ここで過半数の3票以上を得た10作品を賞候補として審議した。

結果、大賞に選ばれたのは、内田望氏の《Moon Rabbit》である。すみずみまで手のこんだ造形に、作者の金工技術の確かさが見て取れると同時に、その一貫した造形性が、むしろジャンルや素材や技法の枠を超えて、ボンと突き抜けた世界を感じさせる点が魅力である。

その‘突き抜け方’という意味で、やはり同じようなことを感じさせたのが、しずくに見立てた紡錘型の内部に小宇宙を出現させた、花塚愛氏《雫の底》(奨励賞)であった。

準大賞の宮尾洋輔氏による《曲硝子舞布船》は、板ガラスに熱を与え、波打つような形をつくり出した作品。制作プロセスそのものが形態を決定するという、今日

の工芸造形の一傾向を典型的に示している。ダイナミックな造形に評価の声が高かった反面、板ガラスという既存の工業素材を、いかにも加工しましたという印象が残ってしまった点が残念だ。

美術奨学会記念賞は、35歳以下の作家を対象とするという賞の性格を考慮しながら選考し、小酒井基紘氏の織作品《ロスチャイルド キリンの行進》と、芦川陽介氏のガラス作品《彩》を選んだ。小酒井氏の作品は、織という技法が持つ繰り返しのリズムを、キリンの行進という具象的なイメージと結びつけた点に新鮮味がある。テキスタイルの素材感と表現のナイーブさが溶け合った、のどかな雰囲気は、ストイックな仕事が多い織造形のなかで異色。一方の芦川氏の作品は、自然物と幾何学形態の組み合わせに既視感があるとの指摘がある一方で、ガラスと木を積層させた新しい‘挑戦’が支持された。

今年新設されたホテルニューグランド賞には、興石孝志氏の《活》を選んだ。じつは、切り絵のように応募数自体が極端に少ない分野は、作品どうしを比較することが難しく、公募展のような場では扱いにくいというのが、審査する側の本音である。しかし、興石氏の場合、染織作品にも通じるような独特の紙の扱いが、そういった難しさを感じさせず、むしろ切り絵という形式から見る側を自由にしてくれるような魅力があったと思う。

最後に、特選の渡邊亜紗子氏《棲みか》と吉岡末子氏《春霞》は、陶や染といった、それぞれの造形技法の性質をストレートに生かした作品。それでいて、技法や材料の縛りを感じさせず、むしろ作品にはのびのびとした雰囲気がある。技法的な観点から見ても見どころがあるが、イメージとしても、想像力をかき立てるような魅力を持っていて、見方によりさまざまな性格が表れ、さまざまな世界とつながった作品だと思う。そしてその多面的なあり方は、今回の工芸部門全体に通じる「魅力」を代表している。

第49回神奈川県美術展の書の部門の出品点数は194点、本年の50回展は153点。41点の減少である。

神奈川県美術展だけではなく、中央の大規模な公募展でも書の出品点数は減少しはじめている。もちろん、多くの展覧会運営機関で、かなり前から減少に対する危機感は抱いていたし、どうにかこれを回避しようという働きかけも行われてきた。しかし、ここにきていよいよ出品減少の傾向が顕在化してきたと言えるのだろう。

点数だけがモノをいうわけではないが、各部門合計で1000点足らずという出品数は、人口が900万人を超える神奈川県が主催する美術展としてはやはり物足りない感が否めない。

県展や市展といった地方公共団体主催の美術展では、会派や中央の展覧会の枠組みを超えた、地域を主体とする集合が魅力である。作家志向の方もいれば、熱心に取り組んだ趣味の成果を発表したいという方もいるだろう。その意味では、制作自体を楽しみ、多様性を楽しむことがその第一義と言えるのではないだろうか。入選・落選や受賞の有無はひとつの目安として、次の制作のための発奮材料とすればいい。

絵画や工芸などに比して、書は人口に膾炙した芸術ということができる。義務教育に書写が位置付けられている以上、その裾野は広く日本国民に広がっている。書は国民芸術なのだ。神奈川県内の書の愛好者も相当数に上るだろう。より多くの参加を募ることで、これまで以上に多様な神奈川の書の姿を見てみたいようにも思う。

審査では、153点全ての作品を通覧したのち

に、5名の審査員が1点から5点までの持ち点を札で示し、その合計点で順位をつけた。この時点での最高点は23点。13点以上の122件を入選と決め、さらに12点の13件について挙手によって再度審査を行い、そのうち6件を入選に加えた。入選総数は128件である。

受賞作の選考は18点以上の25件を対象とした。ただし、35歳以下を対象とする美術奨学会記念賞については18点以上に1件しか当該する作がなかったため、17点から1件繰り上げて選に加えた。

大賞は三宅華子さんの「春暁」と題した篆刻作品。四方の辺縁に変化をつけながら、細身に削いだ線を複雑に交錯させた印象的な朱文印。文字も懷を狭く取る。装飾に陥らない絶妙なラインである。

準大賞の松田紀子さんは身近な言葉を気負わずに表現したことで評価された。神奈川の漢字仮名交じり書を象徴する作と言えるだろう。

特選の岡田珠美さんの良寛の詩歌は、線が冴え、破綻がなく安心して見られる作。また、川名晞心さんは縦横に自在に筆を操り、長年のキャリアを感じさせる。

奨励賞の西澤蒼海さんは、董其昌らを彷彿とさせる正面を向いた表現に高い精神性を感じる。田草川雅子さんは落ち着いた筆の運びで、ジワリと沁み入る味わいがある。竹内絵里子さんと竹内めぐみさんの作にはこねれない部分もあるが、言葉と書を楽しもうという態度が作品に表現されている。奇しくもご姉妹同時受賞だとか。

今年度の応募作品のほとんどはデジタルカメラで撮影されたものか、途中でデジタル処理をおこなったものかと推察されるものでした。しかしながら逆に多重露光などのマニピレーション(操作・加工)を施したものの、ピグメント印画法を彷彿させる出力処理を行ったものなど、アナログカメラの記憶をどこか引きずったような作品が目につきました。

またテーマとしては、肖像権の問題からかもしれません、人物を捉えた作品が減っており、特に子どもの姿などの明るい印象の作品が少なかったように感じました。その分、風景や光や色を抽象的に扱う作品が多かったようです。

大賞の五十嵐航氏の『島時間』はデジタルカメラでインクジェットプリントにて出力したのですが、モノクロで和紙のようなテクスチャー(触感)を感じる紙でプリントされていました。派手な印象ではないのですが、じっくりと作品を見させる魅力の持った作品でした。島の屋下がりにゆっくりと時間を流れていく様子が、3人の人物の姿によって表現されていましたが、最近撮影されたものであるのに懐かしい雰囲気も感じさせ、また視点によっては戦争の記憶も呼び起こさせる重層的な解釈のできる作品でした。準大賞の米山好人氏の『アジア酒場外交』は弾ける笑顔が目を引く作品でした。日本の酒場では少なくなった親しみやすい雑駁な店の様子を、まるでその場の会話が聞こえてきそうな臨場感で表現されていました。特選の伊藤敏児氏の『過ぎし夏』は画面の粒子も粗く、周辺も落ちている作品ですが印象に残る作品でした。審査員の中からは携帯電話に付いているカメラのエフェクト効果を利用し

たものか、との声もでていたのですが、自作によるピンホールカメラを使用したとのこと。最近カメラの原型ともいえるピンホールカメラでの撮影が流行しているようですが、最も古い技術と最新のデジタル技法が似ているということに感慨を覚えます。原田茂雄氏の『母さん私の帽子』は入賞作品の中では唯一の単写真でした。植田正治を彷彿とさせるような色彩と構図で、「写真らしい写真」と評した審査員もいました。奨励賞の日比野英雄氏の『山里の案山子達』は近年話題となっている徳島の「かかしの里」の風景ですが、ユーモラスさに加え、日本の限界集落の持つ現実も写し取っていました。ニコン賞の古郡和敏氏は昨年引き続き東日本大震災をテーマに作品を発表しています。真の復興がまだまだ先のことであることを思い知らされるようでした。特選の商家訓氏の『戦痕』も社会的な視線で構成されたテーマです。写真は美的な要素も踏まえながらも、社会の状況や歴史を伝える重要な役割も担ったものといえます。美術奨学会記念賞の横山和江氏の『横浜中華街の日々』はモノクロでバライタ紙を使用するという、今ではまれな技法であること、日常的なほっとするような情景を捉え、逆に目を引きました。星崎裕基氏の『静かな火』はタイトルにやや違和感を覚えましたが、光の繊細さが表現されていた作品でした。

入賞者が近年常連化しているようです。来年は新しい人材の新たな挑戦を期待しています。



大賞

Moon Rabbit / 内田 望

鉄、真鍮、木、大理石 46×46×63cm 15kg

[略歴] 1987年 神奈川県横浜市生まれ
2010年 多摩美術大学美術学部工芸学科卒業
2012年 多摩美術大学大学院美術研究科工芸専攻修了

[受賞・入選歴] 2009年「夢ビエンナーレ」八王子夢美術館 入選
2010年「第46回神奈川県美術展 平面・立体部門」入選
2011年「第47回神奈川県美術展 工芸部門」美術奨学会記念賞



準大賞

曲硝子舞布船 / 宮尾 洋輔

フロートガラス 52×72×38cm 9.5kg

[略歴] 1972年 東京都生まれ
1999年 多摩美術大学大学院美術研究科修了
2010年 宮富ガラス工房を神奈川県足柄上郡松田町に設立

[展覧会歴] 1999年 日本のガラス展 入選
2000年 市政60周年記念伊丹酒盃台展 優秀賞
2004年 国際ガラス展・金沢 入選
2006年 現代ガラス展in山陽小野田 入選
2007年 国際ガラス展・金沢 入選
2012年 New Glass Review 33 The Corning Museum of Glass 入選
2014年 New Glass Review 35 The Corning Museum of Glass 入選 等



特選

棲みか(4個組) / 渡邊 亜紗子

陶土 35 × 90 × 40cm 7.5kg



特選

春霞 / 吉岡 末子

絹 180 × 150cm 0.8kg



奨励賞

雪の底 / 花塚 愛

陶土 43×36×45cm 7kg



美術奨学会記念賞

ロスチャイルド キリンの行進 / 小酒井 基紘

シルク 28×120cm 3kg



美術奨学会記念賞

彩(3個組) / 芦川 陽介

木、ガラス 40×200×170cm 30kg



ホテルニューグランド賞

活 / 興石 孝志

紙 50×40×3.5cm 3kg



大賞

春曉 / 三宅 華子

印材 7.5 × 7.5cm

印影 33 × 24cm

【略歴】 1967年 東京都に生まれる
1989年 横浜国立大学書道研究室卒

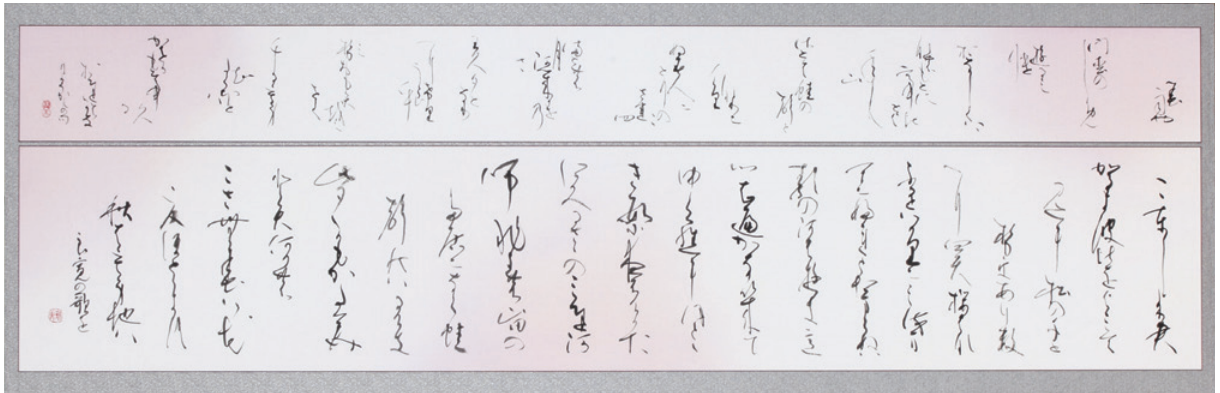
産経国際書会会友
凌雲社総務理事
翰逸会主宰



準大賞

天上の青 / 松田 紀子
182×61cm

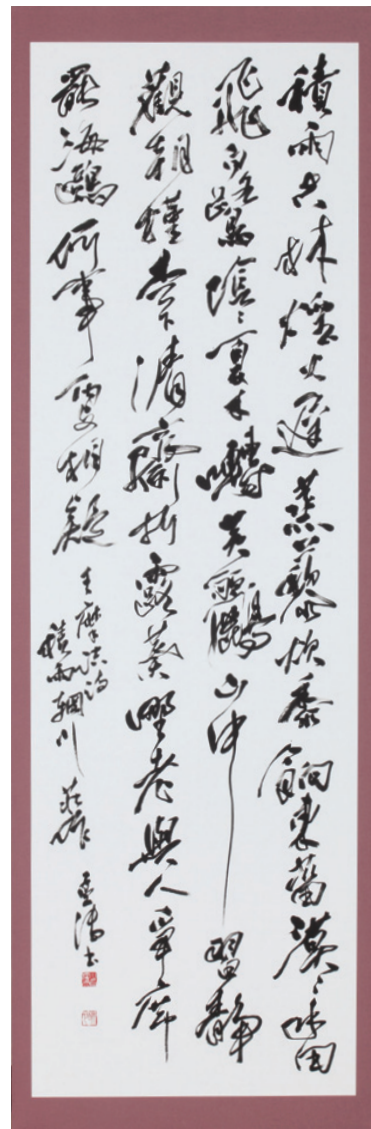
- [略歴]
- | | |
|-------|---------------------------|
| 1954年 | 北海道札幌市生まれ
船本芳雲に師事 |
| 2008年 | 高野山競書大会 金剛峯寺賞受賞 |
| 2010年 | 毎日書道展 毎日賞
神奈川県美術展 特選受賞 |
| 2012年 | 毎日書道展 秀作賞受賞
毎日書道展会員 |



特選

良寛の歌と句 / 岡田 珠美

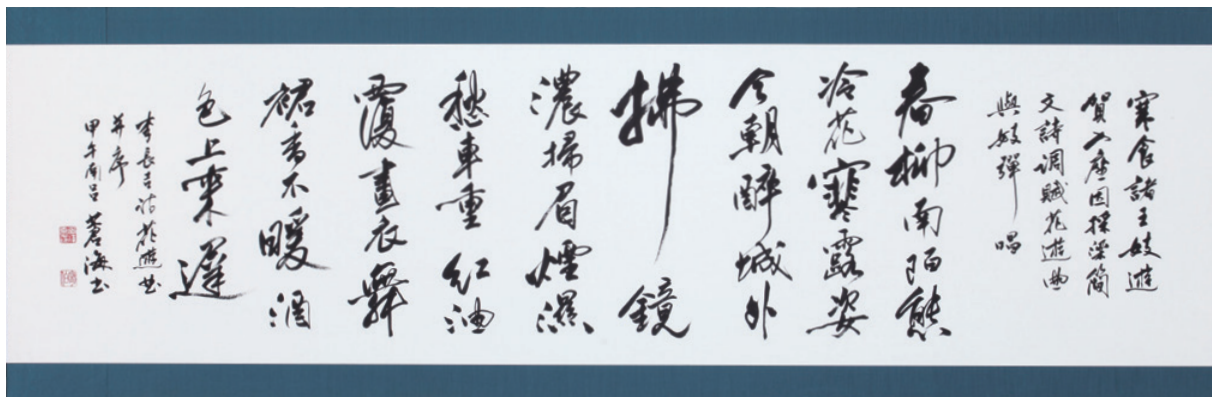
61 × 182cm



特選

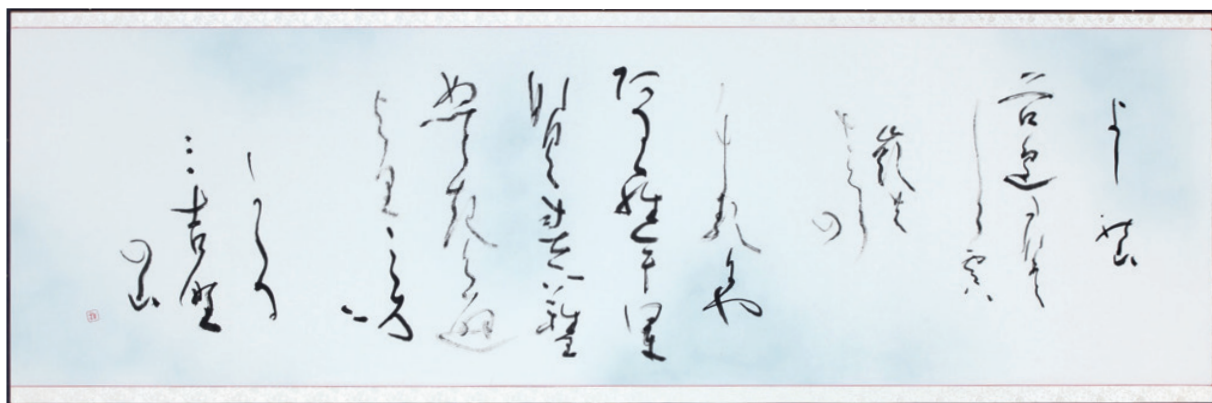
積雨輞川莊作 王維詩 / 川名 晞心

167 × 57cm



奨励賞

李賀詩 花遊曲并序 / 西澤 蒼海
61 × 182cm



県文具事務用品団体連合会賞
吉野山 / 田草川 雅子
61 × 182cm



美術奨学会記念賞

サーカス / 竹内 絵里子
182×61cm



美術奨学会記念賞

若葉かおる / 竹内 めぐみ
182×61cm



大賞

島時間(3枚組) / 五十嵐 航

- 【略歴】
- 1970年 東京生まれ、神奈川育ち
 - 1994年～ シルクスクリーン、ガッシュ画
 - 1999年～ 写真関連の業務に携わる
 - 2005年～ 海外、日本全国を撮影し
情報誌、紀行誌にグラビア、
文筆を掲載
 - 2014年～ ウェブサイト
50storm.comにて写真を掲載





準大賞

アジア酒場外交(3枚組) / 米山 好人

澤村徹氏に師事。人の生活の匂いを求めて日本、アジア諸国の路地裏や市場を歩き、ストリート写真を発表している。古いシネレンズを使ったデジタル表現を得意にする。

〔略歴〕 2012年 神奈川県美術展 写真部門大賞
2014年 写真個展「東アジア三国記」を都内で開催
「オールドレンズ・ライフVol.4」に作品掲載



特選

戦痕(3枚組) / 商家訓



特選

母さん私の帽子 / 原田 茂雄



特選

過ぎし夏(3枚組) / 伊藤 敏児



奨励賞

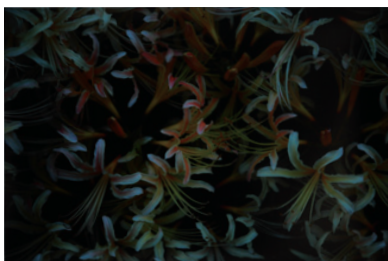
山里の案山子達(3枚組) / 日比野 英雄





ニコン賞

鎮魂の日(3枚組) / 古郡 和敏



美術奨学会記念賞

静かな火(3枚組) / 星崎 裕基



美術奨学会記念賞

横浜中華街の日々(3枚組) / 横山 和江

2期展

平面立体

受賞作品目録

平面立体

大賞	岡村このみ	川崎市	あやつり糸の旅	平面
準大賞	飯島 浩二	埼玉県	古の亀は宇宙を背負っていた	立体
特選	飯田 文香	横浜市	カポック	平面
特選	横山 瑛子	横浜市	冬、照らすⅡ	平面
奨励賞	中村美香子	横浜市	つらなり	平面
県立近代美術館賞	五十嵐恵子	藤沢市	境界にひそむ	平面
県議会議長賞	佐藤 英行	川崎市	からすの舞い	平面
はまぎん財団賞	藤田 明美	横浜市	ブル	立体
美術奨学会記念賞	飯島 夏香	千葉県	沈澱	平面

※県立近代美術館賞は、県立近代美術館による神奈川県美術展に出品された作品の買い上げ賞です。

※美術奨学会記念賞は、長年、神奈川県の美術振興に寄与してきた財団法人神奈川県美術奨学会を記念して創立され、35歳以下を対象とした賞です。

※はまぎん財団賞は、(公財)はまぎん産業文化振興財団から平面立体部門の該当受賞者に贈られる賞です。

※県議会議長賞は、県議会議長から平面立体部門の該当受賞者に贈られる賞です。

※市町村名は現住所です。

※各部門大賞、準大賞の略歴は受賞者の提供によります。

入選作品目録

平面

大塚とみ子	響き
浅井 和子	時・なごり雪 I
渡辺 幸子	命 II
武田 和子	イタリアの風に吹かれて
横山 孝司	ツタ 2
岩本 麻由	ある場所から遠いところ
金子 未弥	Cities&Names (2枚組)
大槻 博	宙ー隕星達の顔
加藤 覚	躍動
知久 茂雄	路地
榎谷 杏子	誰かの
宮ヶ丁 渡	まばたきの夢、呼吸の数 (2枚組)
鈴木 智子	landscape
井口 信	ユートピア
c o b i r d	Airborne
西村 藍	theater
蒲田 宏	驟雨来る
中島 綾美	雪のひとひら
鯉江 桃子	今を仰ぎ見る
河野 良雄	大福寺の大クスノキ
森 織葉	ミナト・ヨコハマ・チャイナタウン
横山 博志	遭難 I
矢田谷 智	Passage (通り道) I
縄井かつみ	照応
桜井 敬子	風景の記 II
平川二三男	滅びゆくもの 軍艦島 14-2
植田田鶴子	わたしも大道芸にでたいの
白石 武市	彼女は、散歩に
飯村 優介	水象水神 T
加藤 力	流像
小師 邦雄	M436
藪奥 晴奈	林
薄井 英俊	私の、これから
川端 敬子	いつか
佐々木 哲	働く人 #11 (京浜工業シリーズ)
飯島 洋子	時の過ぎるまま (1)
安田 文夫	『時は過ぎ行く』・孫たちに伝えたいもの (3枚組)
岡本 緑	風のブランコ
茂野 生世	'14's Work A
石河 靖子	夏みかん

加藤 哲郎	流
濱田 千晴	頓
児玉 高昭	岩窟
對木 隆	風の話
杉山 彩	風を纏う
田辺いづみ	溶けている様な
依田 梓	salvation
安藤 節子	今ここに II
山本 晃代	視差／風景 (3枚組)
稲葉 基泰	Carnival
村尾 芙美	よこすか (2枚組)
広瀬 弘幸	波打ち 1
木下 泰徳	松
井澤 俊子	光と風を織る (II)
金谷ゆみえ	時の景
横山 俊光	アンモナイトの夢
赤堀 英子	森の落し物
佐相 信也	3
神保 健城	ロバのミンミン (2014)
荒井由紀子	前面背面
滝野 初江	ここが好き
齋藤 政義	誕生 (A)
神野 隆起	みなとみらい (横浜)
高橋 洋子	19401303の思考
加藤 浩恵	言葉無き者 II
玉生 由香	platinum fish
和田 健二	This strange space
関 迪子	コンポジション I
田嶋 里菜	太陽にいちばん近い時間 (3枚組)
岡 耕介	壊
千葉 純子	老後
稲田 明	Green monolith
安丸 由子	防風林
青山 雅史	岩窟のある街
亀山 治代	域 I
菊池 浄雲	木
平林 英一	平らな国デンマーク
菊池 如浄	変な海岸
中塚 晴夫	路地裏
野里 安信	旅の僧・普陀山にて

※掲載は出品者番号順です。

入選作品目録

石井 麻美	桜の時
大寺 博	ある朝 - Back clothes of life theaters -
一ノ木タツミ	同伴者
竹田 克哉	GETEN 3
辻本 興一	ミュンヘン街角
澤田 サチ	夢想船
芥川 玲奈	空(くう)
中山 智介	椿
君島 李佳	KOINO・OMAZINAI
小平 功一	DEBUT
三輪 彩音	溶解
日隈 映	待春
根本 雅行	turquoise_02
美濃 寿則	湖畔3
リジュ・ダス	BEAUTIFUL LANDSCAPES(3枚組)
三本 博子	しづ心なく 花の散るらむ
六島 芳朗	残された意識
磯崎 隼士	かりん
稲葉 明子	記憶の精 - I -
肥沼 守	浮遊譚～遊園～
柳田有希子	ここではないどこか
安藤 充	Vortex Algorithm
岡野 睦美	ベッドタウン・ドキュメンタリー

立体

鈴木 元彦	光の存在(4個組)
内田 充	真希子
澤田 将哉	ギガンティズムとマイクロティズム - 卓上万力の場合 - (2個組)
岡田健太郎	netman
竹村 滋	メタルドッグ
平塚 幹男	Little People (77個組)
峯野布祐子	よりそう(2個組)
笠谷 耕二	バナナ(3個組)
中村 宏太	夢枕
小池 浩	ミラーレディー
青木悠太郎	weir (3個組)
山本 夏未	わたしとあなたと(4個組)
堀口 真寿	Continuation 2014
遠藤 良亮	水面
夏目 捷	Salvage Lab.
小泉 恵一	Ioannes Baptista

※掲載は出品者番号順です。

平面立体

本江 邦夫

依然として停滞している社会状況を反映して、出口の無い、内向的な表現に真実味を見せる作品が多いのは例年と同じです。とはいえ、大震災の重苦しい反響にいつまでも揺さぶられているわけにはいきません。余白にとんだスケッチ風の小画面（とても手慣れている）を連ねた、岡村このみさん《あやつり糸の旅》が大賞を得たのは、そこに提示された希望と変化への意志が鮮烈な印象を与えたからです。例年になく立体作品が乏しい中で準大賞を得た飯島浩二さん《古の亀は宇宙を背負っていた》にしても、その最大の魅力は光と動きを取り入れた構成のダイナミズムにあります。私たちは動きたいのです。

最初は、そのイラスト的な装いを敬遠されて落選しかけた飯田文香さん《カポック》（アオイ科の落葉高木）が特選まで上ってきたのは、木漏れ日のなかに佇む若い女性の姿に未来を感じたからに他なりません。同じく特選の横山瑛子さん《冬、照らすⅡ》にしても、真の主題は、丹念に誠実に描かれた墓地ではなく、そこに満ち溢れる冬の光なのです。

私たちは光が欲しいのです。だからこそ、五十嵐恵子さん《境界にひそむ》（県立近代美術館賞）の異様でユーモラスな生物の小さな明かりのような眼に立ち尽くし、藤田明美さんの、流木で作られたブルドッグ（はまぎん財団賞）の表面の光と影に心を奪われるのです。とはいえ、忘れてはなりません。その一方で、私たちの現実はいまだに重苦しく、威圧的であることを。佐藤英行さん《からすの舞い》（県議会議員賞）の大写しにされた黒々とした量塊に対して逃げ場も無く、中村美香子さん《つらなり》（奨励賞）の背骨が剥き出しになった男の異形

の背中に声を呑むばかり。飯島夏香さん《沈澱》（美術奨学会記念賞）の、薄暗い空間の中、顔まで水に浸かり窒息しそうになっている人物は、そうした現実には追いつめられた私たちの最良のメタファーとも言えるでしょう。

他にも注目すべきものはあります。おそらく工場の平坦な一部をまったく無表情に描いた岩本麻由さん。どこまでも広がる砂浜を非情にとらえた広瀬弘幸さん。陰鬱な岩絵具製の蝶を並べて標本にしたかのような宮ヶ丁渡さん。暗闇に潜む無線機(?)に肉薄するcobirdさん。これらに共通するある種の虚無感に対抗するのは、暢気な口バをヘタウマで描いてみせた神保健城さん、明るい彩色で神の救済をあっけらかんと求める依田梓さん、バナナの皮を丸めたものをセラミックで明快に再現した笠谷耕二さん（床置きにしたのが残念!）。そして今回新鮮だったのは稲葉基泰さんの木口木版（世界に冠たる日本の版画は「版画」に籠るのではなく、このようにもっと他流試合をすべきです）。また榎谷杏子さんと六島芳朗さんの、塗りとマチエールのニュアンスを生かした、現代絵画の定番のスタイルは完成度の高いものですが、もっと構築性をもたないと標準を抜けることはできません。その一方で、澤田サチさんの船とも言えない船、平川二三男さんの軍艦島の無定形、そして大寺博さんの、「現実」の表皮を一枚剥いだようなヴィジョンには一それぞれ勢いはあるものの—もう少し洗練への自覚があってしかるべきでしょう。美術というのは結局のところ「色と形」に尽きるのですから。



大賞

あやつり糸の旅 / 岡村 このみ

土佐麻紙、岩絵の具、顔料、パステル、アートグルー、パネル 182×227.3cm

1982年 鹿児島県奄美市生まれ

2005年 和光大学表現学部芸術学科卒業

【個展】

2010年 「花井このみ展」カフェパンセ／神奈川

2012年 「花井このみ SHAME」画廊土瓶／神奈川

【グループ展】

2007年 「FIGURAMA」プラハ・ウィーン・マインツ巡回

2008年 「フィガロマ展」ギャラリー創／神奈川

2011年 「IMA展」静岡県磐田市立中央図書館／静岡

2013年 「きわ」アーツスペース羅針盤／東京

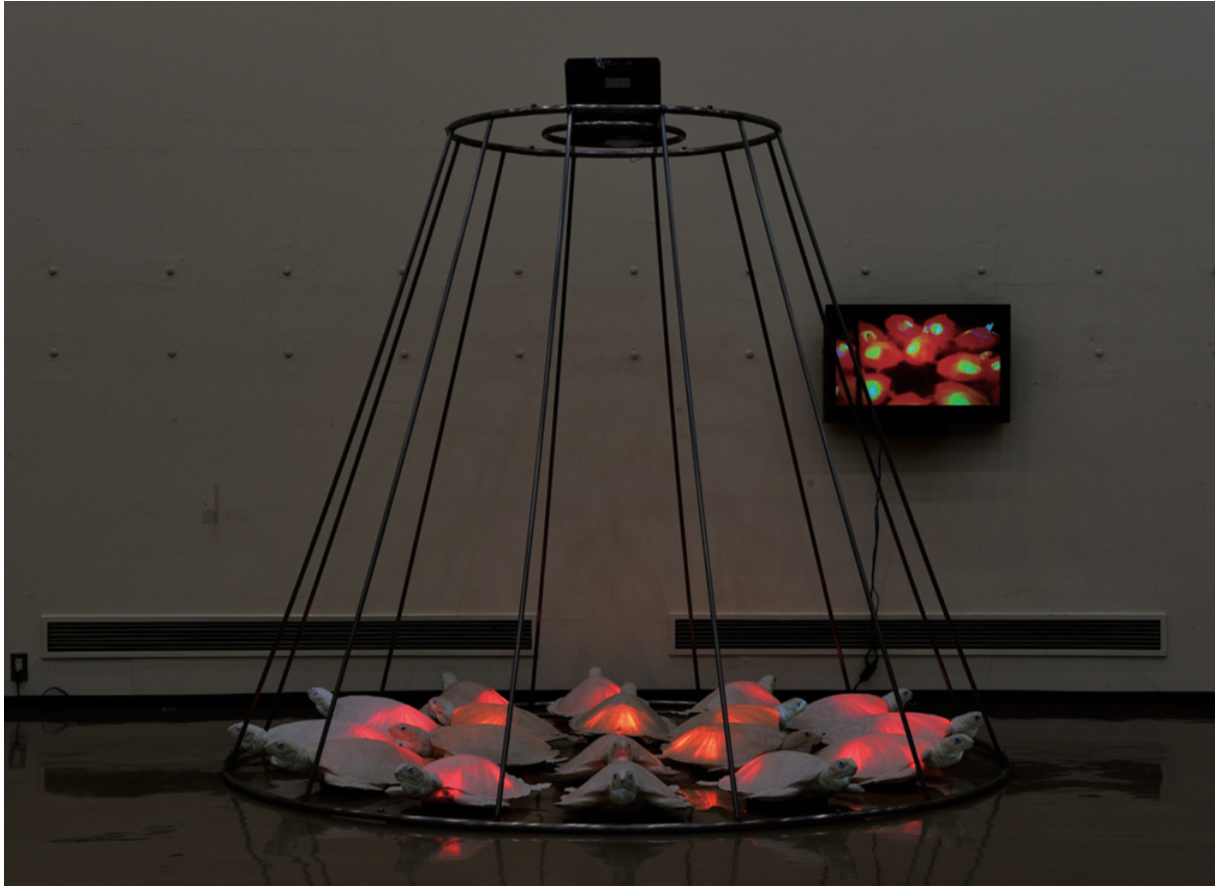
【公募展】

2006年 春季創画展（'08～'13）

2009年 神奈川県美術展（'10'11）

【その他の展示】

2008年 ウエマツウィンドーギャラリー／東京



準大賞

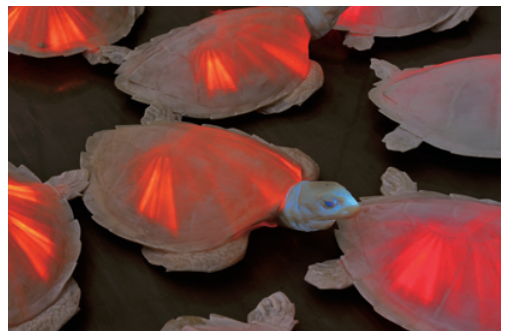
古の亀は宇宙を背負っていた / 飯島 浩二

FRP、ステンレス、etc 300×300×250cm 50kg

1973年横浜市生まれ。1997年武蔵野美術大学卒業と同時に作家活動を始め、2006年まで同大学勤務。同年に渡米し、以後5年間アメリカ大陸を中心に活動。2011年文化庁在外芸術研修を経て帰国。

[主な展覧会]

- 1998年 「第27回現代日本美術展」 東京都美術館 (東京) 他
- 1999年 「TV東京 誰でもピカソ～勝ち抜きアートバトル」に出品(6週連続チャンピオン)
- 2000年 文化庁メディア芸術祭企画展「Robot-ism」 草月会館 (東京)
- 2001年 「かながわアートアニュアル2001」 神奈川県民ホールギャラリー (横浜)
- 2002年 「PHIRIP MORRIS K.K. ART AWARD 2002」 東京国際フォーラム (東京)
- 2004年 「光州ビエンナーレ2004」 光州ビエンナーレ美術館 (光州・韓国)
- 2006年 「KOJI IJIMA Exhibition in L.A. -Fish for a Fish」 Gallery Popkiller (ロサンゼルス)
- 2008年 「アースアートフェスティバル・パブリクティン火山芸術祭」 (メチョアカン州・メキシコ)
- 2009年 「Dogs usually resemble their owners!」 Kazuo h.q. Gallery (ロサンゼルス・米国)
- 2010年 「Between Emergency and Fantasies」 Gallery 825 (ロサンゼルス・米国)
- 2011年 「Better Never Than Late」 埼玉県立近代美術館・ギャラリー (埼玉)
- 2013年 「自画自賛」 Tokyo Art Museum (東京)
- 2014年 「KOJI IJIMA Exhibition in Yangon」 New Zero Art Space (ヤンゴン・ミャンマー)





特選

カポック / 飯田 文香

和紙、岩絵具、水干絵具、パステル、鉛筆 182×230cm



特選

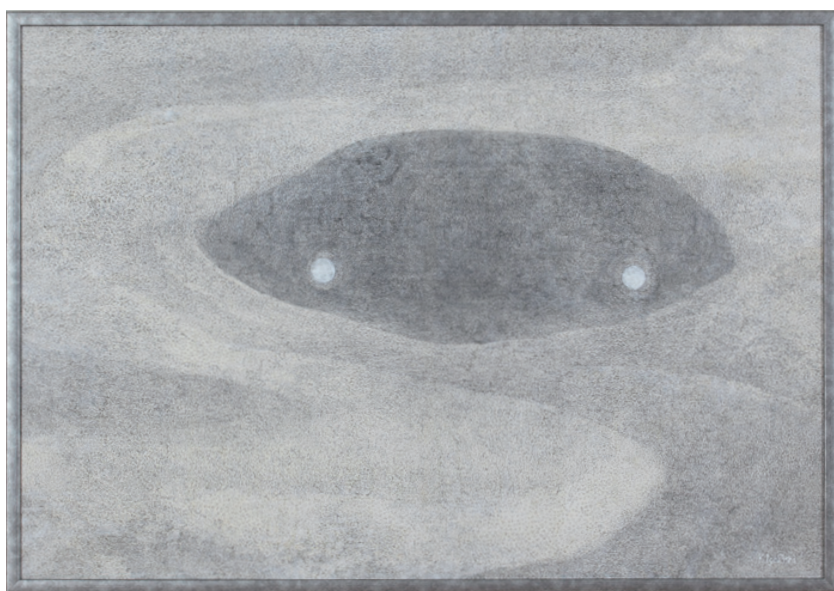
冬、照らすⅡ / 横山 瑛子
油彩、キャンパス 130.5×194cm



奨励賞

つらなり / 中村 美香子

パネルに三彩紙、布、岩絵具 186.3×149.4cm



県立近代美術館賞

境界にひそむ / 五十嵐 恵子

麻紙、鉛筆 112×162cm



県議会議長賞

からすの舞い / 佐藤 英行
コラージュ、油彩 162×162cm



はまぎん財団賞

ブル / 藤田 明美
流木 80×60×60cm 10kg



美術奨学会記念賞
沈澱 / 飯島 夏香
雲肌麻紙 90 × 90cm

神奈川県美術展 50年の歴史

1. 神奈川県美術展誕生のいきさつ

神奈川県美術展（以下「県美術展」）の出自を尋ねようとする、実は神奈川県立近代美術館誕生の話から始めなければならないことを冒頭にお断りしたい。それは占領下にあえぐ神奈川県、とりわけ接収下にある横浜の戦後事情とも深くかかわってくる。

近代美術館の最初の学芸員の一人であった佐々木静一の「鎌倉近代美術館の出発」によると、「どこの県にも、在住画家の作家活動を助成する県展があるが、神奈川県では、昭和24年6月に同年度の県展予算が組まれていた。その年の県展運営のため県下の何人かの美術家に意見が徴されたところ、展示する場所がないため、展示ホールを求める意見が出された。そこで24年8月8日、知事公舎に県在住画家、評論家10名ほどが集まり、日本の玄関である神奈川県として美術館があってしかるべきだという方向に話が発展していき、その推進母体として神奈川県美術家懇話会が設立されることとなった。」という顛末があった。その時の知事公舎での会合で、ちょうど終わったばかりの日本貿易博覧会が行われた野毛にある観光館を改築して美術館にしたかどうかという案が出された。当時県社会教育課の美術館担当であった川口謙二が評論家の吉川逸治と吉沢忠を伴って調査を行ったが、建物が小さく、展覧会場として不相当であると判断した。また川口によると「大船にある県有地も第2候補に上ったが、不相当ということになった。一方、近代美術館設立のことを知った鎌倉八幡宮の座田宮司が、八幡宮敷地内の源平池畔の一部国有地となっていた場所を八幡宮に返還

するよう国に、知事から働きかけてくれることを条件に、源平池畔の現在近代美術館が建っている場所を、美術館敷地として永代無償で借すことを懇話会メンバーであり、後に初代館長になる村田良策を通じて内山知事に働きかけ、横浜設置説が、一転して鎌倉に決まった」という。なお付け加えておくと、前述の吉川と画家の佐藤敬の二人が内山知事に会い、「ほぼ2千万しかない県展会場の予算でも、とにかく近代美術館を建てるべきだと進言したということ」、「予算が少ないので、パリの万国博でやっていたようにしたらよいのではないかと述べ」、設計者としては内山知事もフランス大使館時代に旧知の坂倉準三の名が上った。しかし県の建物は入札制度によらなければならないので、坂倉に前川國男、山下寿郎、谷口吉郎、吉村順三を加えた5人のコンペとなった。

かくして近代美術館建設の問題は、翌年には予算がつき、美術館建設準備委員会も発足して着々と準備が進められ、坂倉準三の設計になる美術館が1951（昭和26）年11月17日開館の運びとなった。ところが美術館の開館で県内の美術家も安堵の胸をなでおろしたのか、県美術展の誕生は10年以上ものびのびになり、1966（昭和41）年ようやく開催の緒にこぎつける。ただともかくこうした経緯から判断できるように近代美術館と県美術展は、正真正銘の兄弟、それもかなり年齢の離れた兄弟だったことが分かる。この歳の差も実は神奈川の特長事情がもたらしたものであった。のちに内山知事は「会館知事」とも呼ばれるほど、県内各地にハコモノを建設する。しかし美術館と美術展の話でも分かるように、ハコ、すなわち人が集まり、議論が交

わされ、交流が生まれる施設が絶対的に不足していた。横浜を中心とした接収下であって、衣食住の絶対的な不足という極限状態のなかで、あえてハコモノを優先させたのである。そのハコが、開館後60年以上も経って、機能的なモダニズム建築の実例として評価されるに至ったのは、歴史のいたずらでなければ、先見の明のしからしむところであったのではないだろうか。

2. 社会教育としての県美術展

ポツダム宣言の受諾により占領下に入った我が国の教育制度はGHQの指導に多く依存することになった。1947(昭和22)年に施行された地方自治法と教育基本法により、地方自治体は日本国憲法に則り、教育の目的を果たす義務を負うことになった。すなわち教育基本法第7条の社会教育2項において、「国及び地方自治体は、図書館、博物館、公民館等の施設の設置、学校の施設の利用その他適当な方法によって教育の目的の実現に努めなければならない」とある。長い戦争でいたるところが焦土と化し、疲労困憊した人々にとっては何よりも食糧の確保と住宅を初めとする生活の再建が目前の関心事であった。そうしたなか1948(昭和23)年「教育委員会法」が公布され、教育の独立性がうたわれる。次いで1949(昭和24)年「社会教育法」が公布され、2年後の1951(昭和26)年法律第285号により博物館法が公布施行され、美術展は博物館の事業の一つとして、すなわち社会教育(芸術教育)の一環として位置づけられることになった。

ところでそれまで美術展は日本ではどのようなものとして考えられていたのだろうか。

1907(明治40)年に文部省美術展が始まるが、それまでは京都や東京で開かれる勸業博覧会の中での美術品や工芸品の展示、すなわち殖産興業を支える歯車の一つに組み込まれていた。ところが勸業博覧会は、パリやロンドンで開かれる万国博覧会をモデルにしており、日本が近代国家としての体裁をとるためには、この万国博覧会の基準に合わせなければならなかった。万国博覧会で通用していた美術と云う翻訳概念を理解し、美術展の開設や、美術学校の開校、美術館建設(実現しなかったが)など、近代国家を支える美術行政の仕組みを早急に整える必要があった。「19世紀後半の国際情勢を前提にした対外・対内の国家戦略として、美術が扱われた」(佐藤道信)のである。こうした国の動きや美術の制度的なインフラが整備されてくるのに対して、自主独立の旗印を掲げ、官展に対抗する在野の美術団体が続々と登場してくるようになる。こうした動きは、思想信条の自由を根幹とする美術の理念の広まりとともに美術における政治学ともいえる現象として表れた。明治後半から大正時代にかけての個性の尊重と自由を謳歌する時代は、美術団体にとってもわが世の春であったが、やがて自由を圧殺する昭和の時代へと突入する。そして戦後の民主化の時代は、日展の復活に対しても、かつての自主独立を詠った良き時代の遺産を受け継ぎながら、反官展を掲げて戦争の時代へ逆戻りする動きへの警戒も怠らない。こうした対立軸の影響は本県の美術界にも及び、県美術展誕生にもう一つのハードルとして作用した。それは1962(昭和37)年9月「県展」と銘打った第1回神奈川県美術家協会展が横浜高島屋で開かれたのである。この展覧

会の発起人は運営委員長の松島一郎と松田ヨシオで、公募はしないで親睦を旨としてスタートしたのだが、2回目以降公募としたので、設立の趣旨が変わったといっておく多くの人が手を引くことになった。戦後の民主主義社会の建設に向おうとするこの時代は、美術の官製化に対して人々の意識は敏感であった。前年に文部省主催の全国県展選抜展が開かれたので、この県展に対しても、7月に県下の美術団体から共同で「県展に対する声明」が出された。声明の内容は、「文化の統制化に対する懸念と、既成画壇重点主義による人選、不明朗な選考方法、女流作家並びに日本画、彫刻、版画その他の締め出しなどであった」（『横浜美術風土記』）。こうして外から見ると「県展」が二つ存在する事態になったのだが、その後の経過と運営組織をみれば両者の違いは自ずから明らかである。時代の変化が展覧会の意味を変質させたのである。

かくして県美術展は、1965（昭和40）年秋から翌年の年明けまで準備委員会や実行委員会などが数回開かれ、この年3月12日から17日までのわずか6日間ではあったが、日本画・洋画・水彩画・版画・彫刻の5部門の公募展が県立近代美術館で開催された。作品搬入点数は1306点で入選は93点、この時の大賞受賞作品は日本画部門から大森運夫の「九十九里」であった。しかも副賞の賞金は100万円で当時としては高額であるが、それは「海外派遣を条件とする」ことが含まれていたからである。以後県美術展は新人作家の登竜門として多数の作家が挑戦を試み、定着していく。なおこの時の招待展は日本画・洋画・版画・彫刻部門が横浜高島屋で、工芸部門が有隣堂で、書部門が松喜屋で開かれた。高島屋

の最終日には三笠宮殿下夫妻が鑑賞する盛り上がりを見せたが、3月17日付神奈川新聞の「県美術展総評」では「コンクール展が異常厳選となった」など厳しい指摘も寄せられた。

ところで県美術展の第1回展が始まる1966（昭和41）年頃と思われるが、当時県立近代美術館館長の土方定一は内山知事について「近代美術館の15周年前後の県展のコンクール部門の展示のときであったと記憶しているが、内山夫人が近代美術館にこられて、一緒に新人作家の絵を見ているときに、内山さんのパリの若い外交官時代の家のなかの階段の壁から、壁という壁に、パリの若い日本人作家の絵を買ってかけていたとか、メキシコ時代の藤田嗣治の作品を買ったときのころなどを、夫人がしんみりと話されたことがある。」と回想している。ここから読み取れるのは、文化的な広がりや厚みの人々のつながりを通してどのようにして実現されてゆくかを問わず語りに示唆していることである。

さて県美術展の公募部門が近代美術館に展示されることになったものの、他の部門の会場が分散して、一堂に会するというわけにはゆかない事情が当初から問題になっていた。5選の任務を終えた内山からバトンタッチを受け継いだ津田知事は、接收下にはアメリカ文化センターなどの施設があった山下公園前の一等地に、2500人収容の大ホールを中心とした文化施設の建設を計画した。その際県美術展を一堂に開催できるギャラリーを付属施設として含めることも盛り込まれた。

こうして第10回県美術展は、1975（昭和50）年1月17日山下公園前に開館した神奈川県民

ホールギャラリーの開館記念行事として開催された。ただし内実は社会教育課の事業として実施された。そしてこの年の4月知事選挙が行われ、革新の長洲一二が当選、地方の時代が到来しつつあった。2年後の1977（昭和52）年5月県の機構改革により県民部文化室が設置され、第13回展から県美術展は文化室が担当することになった。

3. 文化行政としての県美術展

戦後も30年ほど経過して、国や自治体が文化に対する反省と、その再生のための施策に着手しようとする。その前触れは地方からやってきた。それが1960年代後半から始まる飛鳥田市長による横浜の6大事業であり、1970年代半ばから長洲県知事が掲げた文化行政の推進であった。“文化行政”という語は燎原の火のごとく全国に広まったが、その中でよく具体的に取り上げられたのが美術の領域であった。美術館は博物館法という社会教育施設であると同時に文化の殿堂であり、収蔵作品は研究と展示の資料であると同時に美術館の目玉であり、自治体にとっては文化のインフラ整備そのものである。また展覧会の鑑賞という行為は社会教育であり生涯学習でもあるが、市民にとっては文化的活動の一環でもあった。その中でも屋外に置かれた彫刻は具体的で分かりやすかった。

こうした社会教育、あるいは生涯学習から文化行政への、国や自治体の施策の方向転換は、それまでの国や自治体の文化に対する無策ぶりと開発優先の列島作りに対する反省が根本に根差している。横浜三溪園の原三溪のように、近代

化の過程で形成された名望家や富豪によるメセナ活動に頼る時代は終わり、法律や制度による民主化のプロセスを通して官民が一体となって文化の実現に向かう、そういう時代になった。そして国や自治体が文化行政を進めるにあたって強調するのは、あくまで文化の担い手は市民であり、その市民の文化活動を支える基礎的な仕組み作りを受け持つのが国や自治体である。つまり学校教育の延長として国や自治体が負うべき義務と考えられていた社会教育から、市民が権利主体となって進める生涯にわたる学習活動を行政が促し、支援する構造になったのである。とって県美術展の外観が変わったわけではなく、たとえ時代の趨勢に合わせて応募規定が変わることがあっても、いつの時代も美術展が、若者を中心とするチャレンジ精神の実験の場であることに変わることはない。

4. 県美術展の将来展望

県美術展が審査の透明性と公平性を確保するために、毎回審査員を新たにして臨む体制は当初から変わりはない。この審査制が県美術展の最大の特徴だが、全国的にはむしろ都美術館や新国立美術館などで開かれている公募団体展の運営方法に似た、会員による内部的な審査制と位階制を取り入れた県展が多いのではないだろうか。組織体の通弊として創立当初は作家の自主独立の精神が高らかに宣言されるが、長い歴史の中では時には組織の弛緩やマンネリ化が問題になってくる。審査員を外部（県外とか市外）から招待して、少数精鋭の審査でのぞむ地方の

美術展もあり、どこでも審査の公平性と透明性の確保には苦心をしているようだ。

また作品を出品する側にとっての関心事は応募部門であり、現在の平面・立体と工芸、書、写真の部門別はある程度定着してきた感はある。特に平面・立体という部門は、当初日本画、洋画、版画、水彩画、彫刻、立体造形など細かく分かれていた部門を統合したものである。これは、絵画や彫刻という概念に納まりきれない傾向の作品が多く出品された時代背景も影響しているが、それと同時に絵画は画材の違いで見方が異なるものではないということと、絵画を見ることができれば彫刻も見ることができるという考えに基づいて設けられたのである。これも本県美術展の特徴で、若者やベテラン作家が様々な技法をミックスした作品を応募して入選を果たしているのが、整然と日本画と洋画や版画が分けられた他県の美術展の会場と比較すると混乱を覚えるかもしれない。彫刻と立体造形に関しても同じことが言える。審査員は、絵や彫刻を見ることが原点に立って作品と向き合わざるをえなくなる。なお第20回記念の1984（昭和59）年秋には、全国公募の県美術展と野外彫刻展を思い切って実施しており、これは首都圏に位置する神奈川県の特長を生かしたものであった。

ところで展覧会の中には、時代の大きな変化の影響で一定の役割を果たしたとして終了するケースがある。現代日本美術展や安井賞展など全国を対象にした展覧会のことだが、地方のコンクール展には、それとは違った地方ゆえの意義があるといってもよい。文化的な催し物がいたるところに溢れている現在、県美術展も当初

ほどの社会的な影響力が少なくなってきたことは確かである。しかし表現に対する人間の欲求、つまりは昔から人間に特有の創造の精神が絶えないかぎり、県美術展は常に若者からベテランの作家まで、あらゆる挑戦を受けるべく門戸を開いていることこそが使命なのではないだろうか。

（元神奈川県民ホールギャラリー学芸員）

参考文献

- ・『社会教育の動向』神奈川県教育委員会 昭和26年
- ・『県民ホール（仮称）建設準備資料Ⅲ』神奈川県知事室県民課 昭和47年
- ・『光あらたに一内山岩太郎先生追慕の記』内山岩太郎先生を偲ぶ会記念出版刊行委員会 昭和47年
- ・『神奈川の教育 戦後30年のあゆみ』神奈川県教育委員会 昭和54年
- ・『横浜美術風土記』横浜美術風土記編集委員会 昭和57年
- ・『物語 自治体文化行政史』神奈川県文化室 昭和63年
- ・『開館40周年記念 40年の歩み展』神奈川県立近代美術館 平成3年
- ・『明治国家と近代美術』佐藤道信 平成11年

大賞受賞者

第1回	昭和40年度	大森 運夫『九十九里』日本画	第20回	59年度	東谷 武実『日蝕F』版画 西 雅秋『CASTING VIEWPOINT』野外彫刻 林 亘『クリスタル大鉢“洞”』工芸
第2回	41年度	廣瀬 義男『作品I』洋画	第21回	60年度	鶴見 厚子『夢の質感』洋画 石渡 四郎『硫黄島の再会』写真
第3回	42年度	垣内 治雄『坐る』彫刻	第22回	61年度	会田富二男『駆けゆく母子像』彫刻 浜本 舂舟『良寛詩』書
第4回	43年度	川村 直子『'69-A・'69-B』洋画	第23回	62年度	高橋 洋子『WAVE (BLUE FENCE)』立体造形 森山 可余『俳句(原石鼎)』書
第5回	44年度	山井イク夫『Laby70-1・2』立体造形	第24回	63年度	三枝 孝司『複製された場所』版画 菅間ゆみい『夢印象』工芸
第6回	45年度	伊藤 彬『天涯巡礼』日本画 大久保利園『Straw』工芸 西川 万象『盧子諒詩』書 加賀谷武男『にっぽん NONSENSE ZONE』写真	第25回	平成元年度	セツ・スズキ『アンタニハワカルメ』彫刻 片岡 順一『大気現象』写真
第7回	46年度	中西新太郎『落日』洋画 島津 碧崑『寒山詩』書 大谷 正夫『師ミス・ザンダー(フェリス女学院)』写真	第26回	2年度	山本 靖久『時の化石—豊沃のかたち』洋画 高橋あづま『遥かなる亜熱帯』工芸
第8回	47年度	佐々木英夫『人間の風景1・2』版画 林 良達『騎士』工芸	第27回	3年度	荒井 正美『蟻の迷走』彫刻 相沢 順一『樹界』写真
第9回	48年度	河原 明『蜻蛉』彫刻 石川 充宏『Girl in chair』工芸	第28回	4年度	たべけんぞう『MAGNETIC FIELD92-2』立体造形 中森 万象『郎士元詩』書
第10回	49年度	大山 鎮『語り』日本画	第29回	5年度	王 青『チベットの娘』日本画 平野 朱美『電解ザウルス』工芸
第11回	50年度	鎌田 恵子『Lost my way』工芸	第30回	6年度	辻 忍『野辺』彫刻・立体造形 八木 香葉『笹澤美明詩 菊』書
第12回	51年度	泉谷 淑夫『愁傷のモニュメント』洋画	第31回	7年度	R 津田『封印—過去と未来—』彫刻・立体造形 中田 文『阿弥陀堂釜』工芸
第13回	52年度	井上 麦『黒の女-'77』彫刻	第32回	8年度	結城 勉『個々の領域—群像II』平面・立体 今井今日子『Twilight—黄昏—』工芸 中西 雅舟『百人一首より』書 中谷 晴男『山の民(ネパール)』写真
第14回	53年度	坂田 一之『MIRROR』立体造形	第33回	9年度	剣持 啓子『SANAGI—予兆』平面・立体 村田 則子『レクイエム』工芸 島田 幸舟『白鳥』書 渡部 満『1.8朝』写真
第15回	54年度	前本 利彦『暗い部屋I, II』日本画 川口 流坡『菅原道真詩』書			
第16回	55年度	和久井Who『HANGING』立体造形 市原 欣一『ふるさと』写真			
第17回	56年度	坂井 彰夫『SEISHO』彫刻 高木 参平『BODY』工芸			
第18回	57年度	小泉 正彦『冬の木』洋画 井上 隆敏『イグナドバ選手』写真			
第19回	58年度	井上 麦『土の系譜』彫刻 茶木 静谷『竹薺松影』書			

第34回	10年度	笹井 弘『動植物』平面立体 堀口 成依『M!! きみ想う』工芸 大岸 昌子『源氏物語』書 君塚 宣良『還暦を迎える階段』写真	第43回	19年度	小笠原 森『untitled』平面立体 吉田 晴弥『源の始まり』工芸 矢島 虹周『小倉山』書 市川 雅章『夢売り場』写真
第35回	11年度	川田 祐子『BIO-PANORAMA』平面立体 斉藤 龍也『白化粧象嵌花器』工芸 稲葉 竹苑『観雨』書 林 京子『午後の街』写真	第44回	20年度	大石 麻央『アダムとイヴ もしくは自分の愛し方』平面立体 吉井こころ『月海—つきうみ—』工芸 茂住 菁邨『称薦』書 中山洋之助『将棋三昧(3枚組)』写真
第36回	12年度	川城 夏未『BALANCE 2000 No.1』平面立体 『BALANCE 2000 No.2』 深瀬知嘉子『陰翳』工芸 松原 隆『白の風景』書 吉田 陽子『最後の楽園(ガラパゴス)』写真	第45回	21年度	高橋 善一『Hornet II』平面立体 丸山 愛『striplay』工芸 松永 光鳳『三十六歌仙』書 永山 悦朗『記憶・パキスタン地震(3枚組)』写真
第37回	13年度	小林 秀幹『静かな流れの中で』平面立体 羽鳥 恵子『彩泥象嵌鉢』工芸 和田 清泉『花にのる』書 福田 幸子『女瞳私1.2.3. (NUDE)』写真	第46回	22年度	菅原 有生『くさはら I』平面立体 池田 節子『藍遊び』工芸 二瓶 祥舟『夜行』書 漆原 利大『追憶(3枚組)』写真
第38回	14年度	高梨 裕理『水面』平面立体 三輪 博子『河』工芸 栃木 郁子『田中冬二の詩』書 嶺岸 良太『far away—いつか置いてきたもの—I~V』写真	第47回	23年度	古井 彩夏『Continual zone』平面立体 荒 姿寿『Endless flow』工芸 板越 蒼龍『秋興八首内三首』書 長尾 宏『猛暑日(3枚組)』写真
第39回	15年度	井上 達也『植勢II』平面立体 小田中 藍『「おやすみ」とは言っても・・・』工芸 幡野 恵子『論語』書 金親 敏雄『都市幻影』写真	第48回	24年度	西野由瑠子『永劫』平面立体 小泉 昌浩『Catastrophe』工芸 喜多 光蓮『万葉のうた』書 米山 好人『山間の街』写真
第40回	16年度	坂本 友里『ゆめのかず』平面立体 大槻 洋介『孔』工芸 古屋恵美子『田部井花子の歌』書 内藤 秀和『沈黙の機関(第五福竜丸エンジン)』写真	第49回	25年度	安田 文夫『がん告知・余命?・孫と遊ぶ(2枚組)』平面立体 土橋 一博『流流文鉢』工芸 井上 春苑『張子容詩』書 加山 邦輔『郷里.8.15(3枚組)』写真
第41回	17年度	三原奈津子『IN MY CLOSET <melting times>』平面立体 尼子 裕美『EXODUS』工芸 中村 暁雲『毛序詩』書 古郡 和敏『原宿寸描(2枚組)』写真	第50回	26年度	岡村このみ『あやつり糸の旅』平面立体 内田 望『Moon Rabbit』工芸 三宅 華子『春暁』書 五十嵐 航『島時間(3枚組)』写真
第42回	18年度	田中 幹『COCOON』平面立体 岡本 明子『COBALT BLUE』工芸 宮脇小夜子『秋登宣城謝朓北樓』書 商 家訓『路傍の華(3枚組)』写真			

県展きよう開幕

無料
公開
横浜、鎌倉の四会場で

県美術展委員会、県教委主催の「第一回県美術展」は十二日から十七日まで、コンクール展は鎌倉鶴岡八幡宮境内の県立近代美術館

鶴見の家具センター

日高家具店

で、また招待展は横浜高島屋（絵画、彫刻）有隣堂（工芸）松置屋（書道）の三会場に分かれて開かれる。

コンクール展には賞金百万円を獲得した原美術展大賞の大森運夫さん（四〇）川崎市細山四四一の

日本画「九十九里」をはじめ絵画、彫刻の入賞入選作品九十三点が公開される。一方、招待展には県内在住の大家多数が力作を出品している。各会場とも入場無料。

春を競う県美術界

県展花やかに幕あけ

四会場に二百四十一一点

「第一回県美術展」は県美術展委員会、県教委主催で十二日からソークール展が鎌倉の県立近代美術館、

招待展は横浜高島屋（絵画、彫刻）有隣堂（工芸）松宮屋（書道）の三会場に分かれて一斉に幕をあけ

た。わが国屈指の美術県をほこる神奈川美術界の全容を紹介しようという画期的な催しで、県内在住の大

家、中堅、新鋭の力作三百四十一一点（コンクール展九十三点、招待展一百四十八点）が展示されている。

初日は暖かい日より恵まれ、各会場とも早朝からつめかけた熱心なファンでにぎわった。十七日まで。

鎌倉の県立近代美術館には絵画、彫刻の入選作品九十三点が、一入選率、十二分の一強」という



喜びのことはをのべる大賞受賞の大森さんニシルク

狭き門を突破したものに、レ、どこの近作が顔をそろえたので、ベルが高い。なかでも海外留学者、金目四郎の県美術展大賞を獲得した川崎市細山四一、大森連夫さん（この番号「九十九」の前はかなりの人だかり。

横浜高島屋の招待展会場も日本画の前田青嶋、安田朝彦の四元老をはじめ伊東深木、小倉遊亀、洋画の有馬生馬、小山敏三、木下孝則、版画の棟方志功、彫刻の加藤銀治といった日本美術界の一流がめっていた。この会場はいつもの

催しでは学生客が多いが、この日は中年若年の見学者がめだち、陶芸の加藤十朗朗（無形文化財）、河村清山（日展審査員）両氏をはじめ日本工芸界のトップレベルの逸品を真剣にみつめていた。

松宮屋の書道招待展会場も殿村藍田、町春草、西村西洲、野田蘭洞、松岡東庵、田中真洲など人気作家各氏が筆勢をきそいながらの盛況。気になった作品をみつめて「弟子入りしたいのですが、あの先生の任所を」と店員に聞く婦人もいた。「エレベーターでこの会場をめざして一本ヤリに飛びこんでくるお客さんが多い。時間をかけて見てゆきます」と係員も感心していた。



招待作家の力作がずらり並んだ横浜高島屋会場

拙速的欠陥、改善の要

県美術展総評

まずまずの成果収める

県美術展委員会、県教委主催の第一回県美術展が開かれた。招待展には県下の代表的な美術家二百三十八人が参加し、またコンクール展には入選作品九十三点が展示された。主義主張や所属会派を異にする多数の美術家が同じ旗のもとに結集することはきわめて難事であり、多くの障害を乗り越えてこの大事業を実現させた関係者の努力に敬意を表したい。

招待展の会場を巡観すると、絵画、彫刻、工芸、書道の一流作家の珠玉のような名作が出品されている。各美術団体相互の対立と確執が激しい日本の芸術界ではこのように会派の違う諸大家がひとつの展覧会に作品をならべるのは珍しいことであり、同じ神奈川県民であるという素朴な友情と隣人愛が暖かく会場を流れている。しかしながら功成り名とげた老大家の出品に誠実真剣な意欲の逸品が多いのにくらべて、働きかきの中堅クラスにおきなりな凡作がやたらと目につくのは、招待展の美名が泣く。

コンクール展の作品群は概観してまずまずの水準に達しており、中央の一流展なみのみごとさである。なかでも洋画では大野増穂、頭群を抜く秀作は見えてきないの

る。なかでも洋画では大野増穂、頭群を抜く秀作は見えてきないの

河村春水、桐生照子、高岡夏樹、伊藤武治、森秀男、佐藤正光、牧島孝子、日本画では大森連夫、水谷愛子、彫刻の熊坂寛子といった



大森連夫「九十九里」(県美術展大賞受賞作)

長老作家の意見のなかに、批判と

いうよりもむしろ非難に近い激越

な発言が聞かれるのは看過できな

いことである。

たとえば、まず第一にこの催し

の企画の進め方や運営方法などに

官展的な権威主義や独善性が色濃

く感じられるという。大賞百万円

の人氣もあってコンクール展には

千三百余点の大量応募があった

が、入選作品として展示されたの

はわずか七%の九十三点であつた。

中央美術界の一流専門展でも

このように異常な厳選はほとんど

聞いたことがない。しかも一点五

百円、五点では二千五百円という

商業展なみの出品手数料を徴取し

たのである。県展の開催方法につ

いてはいろいろの考案があるう

が、「県・美の祭典」としての基

本的性格からいへば、さまざまの

芸術主張や個性と将来の可能性を

もつてできるだけ多数の新人作家に

広く発表の場を開放することが望

ましいのではなからうか。もし嚴

選主義をよしとするなら、手数料

は少額または無料にして、百号作

品一点の制作費に数万円を要する

貧しい作家に思いやりをしめすの

が公共展としての親心ではあるま

いか。県下で最も伝統の古い公辦

展である「ハマ展」では出品五

点まで手数料は五百円であり、出

品の四〇%前後を入選させてい

る。また先ごろ開かれた勤労者総

合美術展の出品手数料は一点につ

き百円で応募作の全部を展示した

という。

このように県コンクール展が異

常厳選となった理由は、会場の録

倉・県立近代美術館が狭いために

ある。酒井・県美術展委員長も

「展示したいりっぱな作品が入選

作品数の二倍近くもあったが、録

倉の会場が狭いので残念だった」

と率直にのべている。この点につ

いても、毎年のハマ展で千点以上

の応募が集まるのをみれば、県美

術展に応募作品が殺到するであろ

うことは当然予測できたはずであ

る。このほか、昨年末の県教委発

表による募集要項予定では作品の

大きさが50号以内の見込みとなっ

ていたのに、多くの作家が50号作

品の制作を進めていたのに、搬入

約一カ月前の一月末になつて突如

として百号に決定したことなど、

出品作家の立ち場を考えない仕

打ちであるという抗議も聞かれ

る。

いずれにしても、県美術展は今

回が初年度であり、準備期間も短

期であつたから、すべての面では

万全を期し得ず、拙速的な欠陥を

多少露呈したことはむしろ当然

である。主権者側にも同情すべき点

がある。しかも、多くの批判がある

にもかかわらず、県展開催の意義

の画期的大きき評価については

異論はないのであるから、もしこ

の催しの今後の隆盛のために改善

すべき公正な意見があるのなら、

県美術展当局としても謙虚に傾聴

すべきであらう。県民のための県

展、県美術、ひいては日本美術、

世界美術の発展のための県展の実

現に向かつて前進できるよう関係

者の善意と協力に期待したい。

(榎本)

県美術展 十七日まで。コンク

ル展

は横浜高島屋有隣堂松島屋で。



県展をご覧になる三笠宮妃殿下と甯子さん

県展を鑑賞

三笠宮妃と甯子さん

十七日午後、三笠宮妃殿下はこのほど納采の儀をおえた甯子さんと横浜高島屋で開催中の第一回県美術展招待展と円照寺山村御流生け花展を飯田社長夫妻らの案内でご覧になった。七階の生け花展会場では自然の美しさを尊ぶ門跡華道に深い関心を示され、こまかい質問をまじえながら作品のひとつひとつを入念に鑑賞された。八階の県展招待展会場では会場いっばいに陳列された作品に目を見はら

れていた。鑑賞時間は両会場あわせて予定

の三十分より二十分も上まわったが、お二人とも「たいへんいい展覧会でした」と非常にお喜びになっていた。この日妃殿下がクリソンのツイピースに白ハット、甯子さんがイエローのツイピースという春らしい服装だったが、甯子さんの左手に光るエンゲージリングが印象的。会場に押しかけた若い女性は絵の方をそっちのけで、「きれいな方ね」「まあすてき」を連発しながら甯子さんに見とれていた。

神奈川県美術展第50回開催を記念して、これまでに開催された展覧会の全図録をインターネットで閲覧していただけるようデジタルアーカイブとして公開しています。

神奈川県民ホールギャラリーのホームページより、



をクリックするとご覧いただけます。





 有隣堂

画材／書道用品／製図デザイン用品コーナー

■伊勢佐木町本店(4F)…………… TEL.(045)261-1231

■厚木店(4F)…………… TEL.(046)223-4111

■藤沢店(フジサワ名店ビル4F)…………… TEL.(0466)26-1411

※藤沢店は書道用品のみ取り扱っております。

eco noge は、野毛印刷が推進する
環境保護をテーマとした
活動および事業展開です。



たいせつなものを もっとたいせつに。

例えば、情報に命を吹きこむということ、
例えば、個人情報をたいせつに扱うということ、
例えば、環境にやさしい印刷をするということ。
私たちに求められるたいせつなこと、たいせつなものを、
もっともっとたいせつに。
創業以来60余年の実績を誇る印刷事業をベースに
常に時代のニーズへ対応する野毛印刷は、
さまざまなメディアを駆使して、
情報の新しい価値を創造します。



当社営業企画本部・福浦工場は
グリーンプリンティング認定工場に
認定されました。



水を使わず、水を汚さない
環境にやさしい
水なし印刷を採用しています。



人にも社会にもやさしい製品づくりを
推進し、MUD(メディア・ユニバーサル・
デザイン)協会に参画。



ISO 国際標準に準拠した
国内で唯一の印刷の標準規格、
「Japan Color 標準印刷認証」を取得しました。

ISO 9001・14001・27001
JIS Q15001 認証取得

野毛印刷

営業企画本部／横浜市内南区新川町 1-2 〒232-0027

☎(045) 252-2511

<http://www.noge.co.jp>

The 50th Kanagawa Art Exhibition 2014

第50回神奈川県美術展

発行：神奈川県美術展委員会

神奈川県民ホール 事業制作第一課内

〒231-0023 横浜市中区山下町 3-1

TEL. 045-662-5901 (代)

写真撮影：奥野 規

印刷：株式会社野毛印刷社

発行：2014年10月5日



